

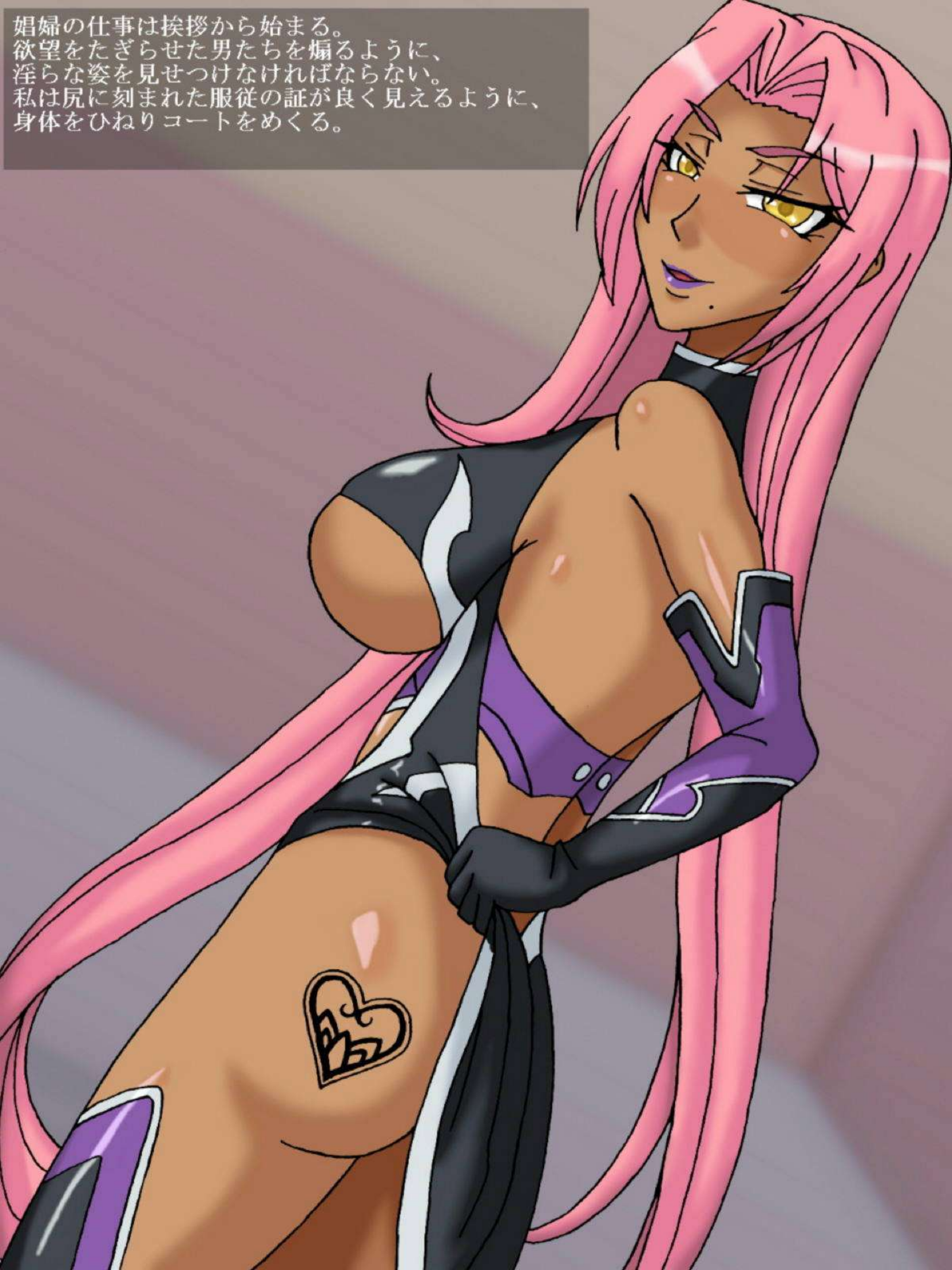


雌ブタ魔界騎士様は修行中

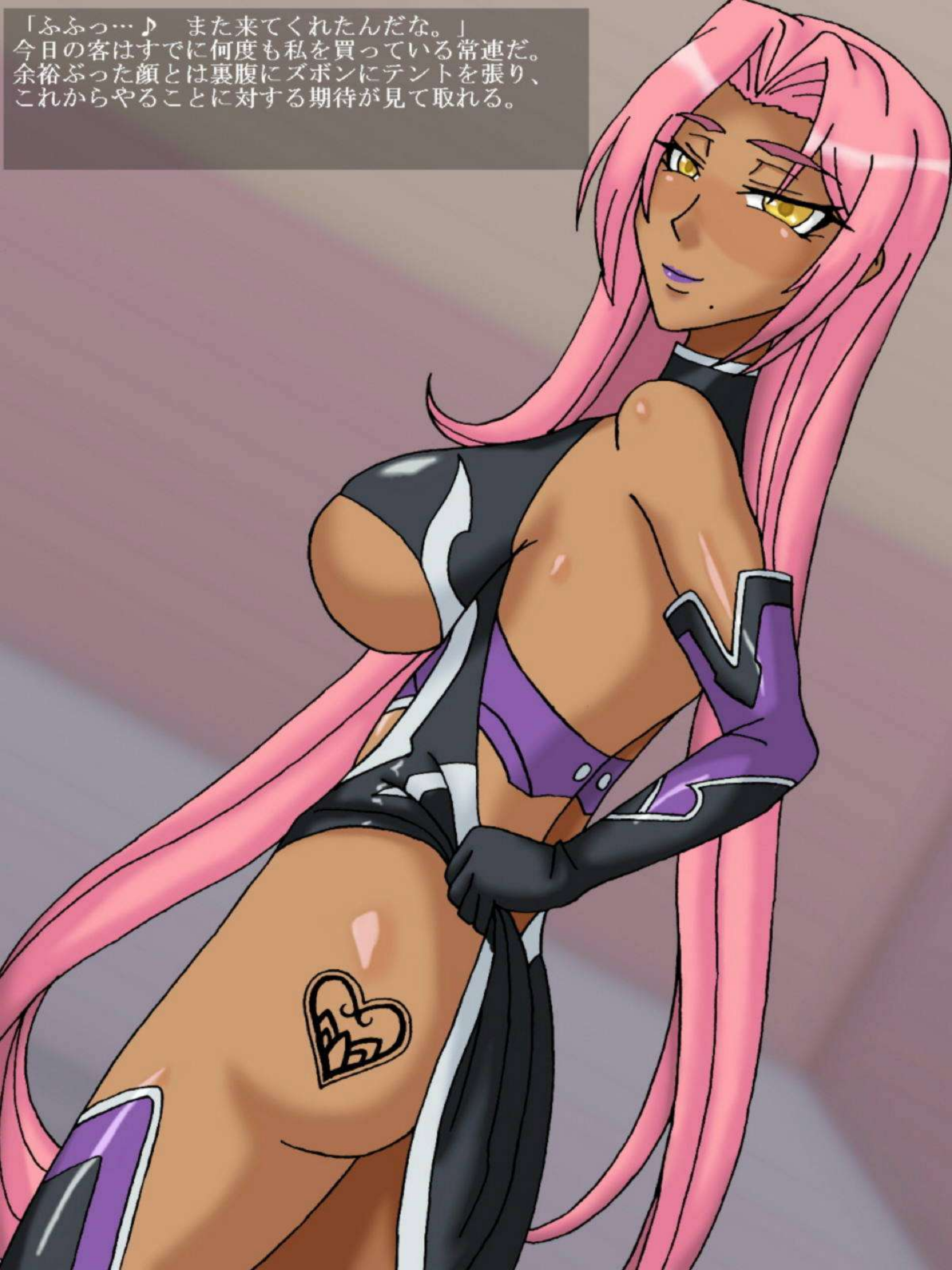


マシーナリー

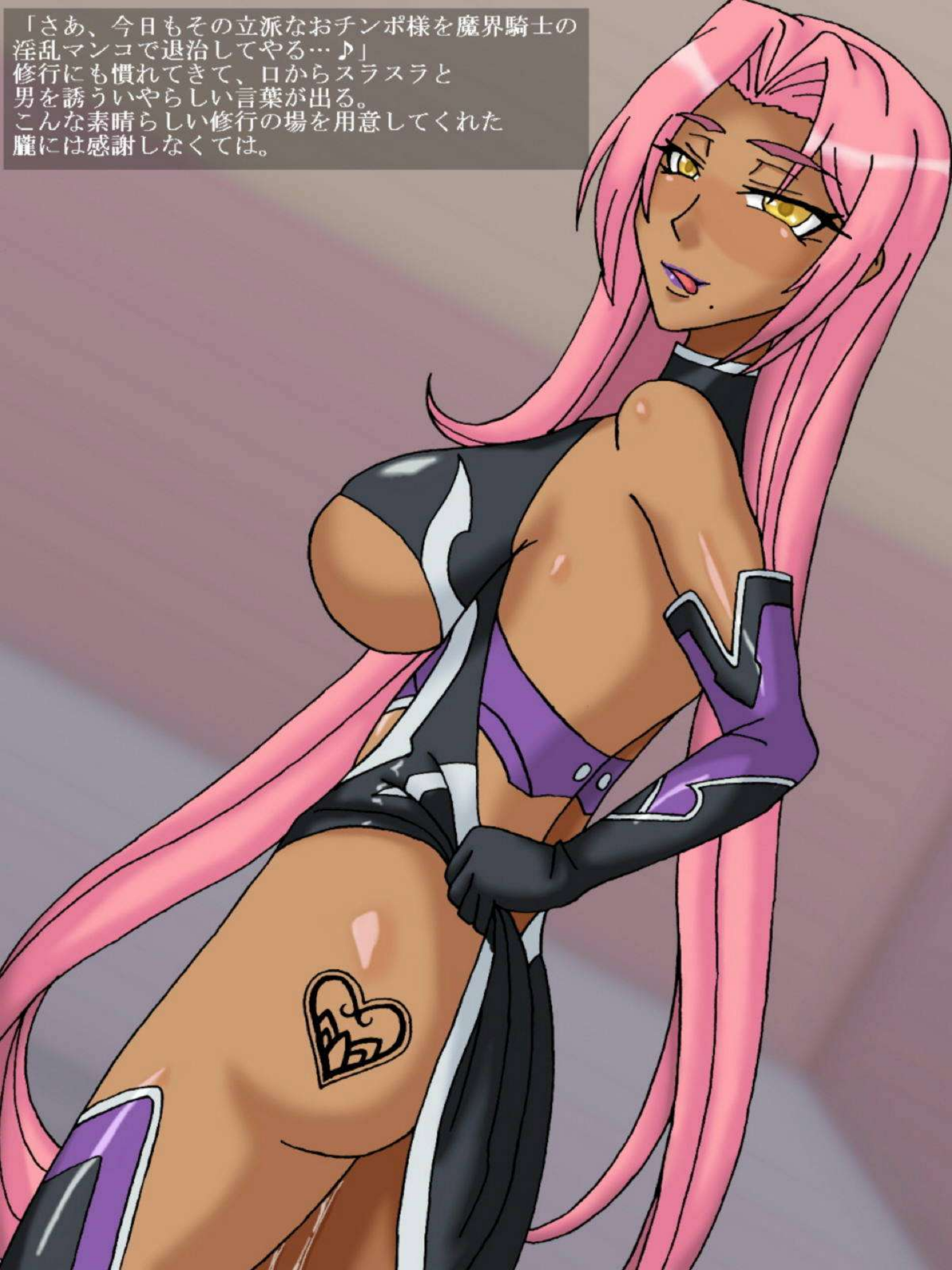
娼婦の仕事は挨拶から始まる。  
欲望をたぎらせた男たちを煽るように、  
淫らな姿を見せつけなければならない。  
私は尻に刻まれた服従の証が良く見えるように、  
身体をひねりコートをめくる。



「ふふっ…♪ また来てくれたんだな。」  
今日の客はすでに何度も私を買っている常連だ。  
余裕ぶった顔とは裏腹にズボンにテントを張り、  
これからやることに対する期待が見て取れる。



「さあ、今日もその立派なおチンポ様を魔界騎士の淫乱マンコで退治してやる…♪」  
修行にも慣れてきて、口からスラスラと男を誘ういやらしい言葉が出る。こんな素晴らしい修行の場を用意してくれた魔には感謝しなくては。





ググ  
ググ

ググ  
ググイッ

客に言われ、私は両手を腰の後ろで組み、脚を広げた。  
「んっ……はああん…♪  
そこは…んんっ…弱い、のおお♪」  
魔薬改造で大きく、長くなった乳首をつままれる。  
指で転がすように刺激され、  
乳首は充血しガチガチに硬くなる。  
「もう…そこぼっかり……あん♪」



「んひいいん☆ ダメえ…感じすぎて…ひいいんっ☆」  
クリトリスはあ…感じすぎて…ひいいんっ☆  
穴のあいた下着からとび出しているクリトリスを  
押しつぶすようにつままれた。  
ただでさえ敏感な部分を乱暴に扱われ、  
まともな身体なら痛みしか感じないところだが、  
改造を施されたこの身体は快樂のみを伝えてくる。



「今度は私がシてやろう。ふふっ、すぐに出すんじゃないぞ？」  
私は膝をつき、ジッパーを開ける。大きく勃起したチンポを取り出し、下をはわせる。  
「ん… ちゅば、ちゅば……どうら？  
わたひの…ん…舌は……♪」

ちゅばは♡

ちゅばは♡



「ん… 私が…しゃぶっているところを…  
ちゅ…写真に…とりたひらと…？ ん…♪」  
客はすでにカメラを取り出して用意している。  
「んちゅ… まあ、かまわなひが…んん…  
なに、ピースサイン？ ちゅ…これで…いいか…？」



「んっ… ほら、好きなだけとれ… ちゅぷっ…♪」  
私はピースしたまま、レンズを見つめてチンポを  
しゃぶり続ける。  
客は快楽に浸りながらも何度もシャッターを切り、  
私の痴態をカメラに収めた。  
「あっ…♪ 出た、出たぁ♪ ふふふ…  
ずいぶん貯めて来たんだな♪」  
私の顔が白く汚される瞬間も、精液を味わう  
だらしない顔も、すべて記録に残されてしまった。

ドロオオ♡

客を射精させて余裕のあった私は、客に跨り  
自らチンポをオマンコにねじ込んだ。  
「今日は私が動いてやる。 ほら、ほら♪  
気持ちいいだろう？」  
先ほどのアクメから時間が経っていたこともあり、  
最初の内は積極的に客を責めることができた。



しかし、時間が経つと元々が快楽に弱いため、  
すぐに主導権を奪われてしまった。  
「んおっ♪ おっ♪おっ♪ おほおお♪」  
獣の様な声を上げながら、ただただ下からの  
突き上げに反応し、なすがままに撻られる。  
「おひいい☆ 奥、おくうう☆ だめえ♪  
そんな…おくまでえええええ☆」



「のほおおおお☆ 子種じるうう… 子宮に…  
どびゅどびゅってええ…… んんうう…  
あふれて、くるうううう☆☆☆」  
舌を突き出し白目をむいた無様なアへ顔を晒しながら  
私は子宮を蹂躞された。





客が休憩がてら少し散歩をしようと言ってきた。  
私を買われた時間は1晩。その間、ヨミハラから  
でない限り何をやってもかまわないという条件だ。  
客は散歩と言ったが、ただの散歩であるはずがない。  
クリトリスにピアスを付け、そこにリードを  
繋がれて私は外に連れ出された。



「くっ…あぁっ…！」 そんなに…引っ張らないでっ  
あんっ☆」  
周りの人に見せつけるようにして、客は私のリードを  
引く。引っ張られるたびに軽くイキながら、  
ふらふらした足取りで何とかついていく。  
多くの娼婦が住むこの街ですら、これほど惨めな姿を  
晒すものは珍しい。男たちからの情欲にまみれた  
視線と、女たちの軽蔑の声が私を責める。



「イクッ…！ もう、がまん…できな…あっ、あっ、  
イク、イクグウウウウウ☆☆」  
ひととき大きな絶頂が訪れる。  
「ワンッ、ワンっ♪ うれションしながら  
イキまくってますうう♪ ワン、ワンワンっ☆☆」  
客に言われたとおりに、大勢の人に見られながら  
小便を垂れ流し、犬の鳴きまねをしながら  
イッたことを宣言した。





店に戻ってきた私は休む間もなく怪しげな椅子に座らせられた。バンドで手足を固定され、身動きは取れない。  
「今度は何を… あひいいん♪」  
卵型のローターをマンコの奥に押し込まれる。  
「んぐっ… そんなに、いっぱい… んぎいい☆」  
次から次へと大量のローターを入れられていく。



「んぎいいい！止めて、とめてえええ☆」  
最終的にマンコに6つ、アナルに8つ、タリと  
両乳首に2つづつ、へそにまで1つ貼り付けられた。  
それらの大量のローターが一斉に震えだしたため、  
私は連続絶頂の地獄に投げ出された。  
「ぶるぶるがあ、ひいい☆らめ、こんらの…  
こわれひやうううううう☆☆☆」



「んあゝあゝあゝ あああああ……☆」  
30分以上、ローターに体を弄ばれ、  
やっと止まった時には息も絶え絶えになっていた。  
全身の穴という穴から汗を垂れ流し、先ほど  
出したばかりだというのに、再び放尿まで  
してしまった。  
頭の中は真っ白で、まともに言葉を発することも  
出来なくなっていた。

椅子からは解放されたが、私は立っていることができず床に座り込んでしまった。  
そこへ、客が小便をしたくなつたと言う。  
「…どうぞ、私の口マンコ便器を使ってくれ…」  
私は魔界騎士として恥ずかしくないように、  
即座に口便器を差し出した。



「おっ♪ おぼっ、ぼお♪ ごぼおお♪」  
便器になりきった私は口を開け、下を突き出し  
客の小便を受け入れる。  
使ってもらえることの嬉しさを感じながら、  
出されるものを飲み続けた。



「ごちそうさまでした…☆ おいしいオシッコ…  
ありがとうございます…☆」  
少しこぼしてしまったりもしたが、大半は  
飲み込むことができた。  
「ああ… あまりにおいしくて、飲んでるだけで  
2回もイッてしまいました…♪」





「メス豚騎士の……クズマンコを…舐めて下さり…  
ありがとう…ございました……。  
修行中の身ですが…よろしければ……  
またお相手して下さい…☆」  
この客は来るたびに行為がエスカレートしていた。  
次に来たときにはどんなことをされるのだろうと  
考えながら、半ば気絶するように眠りについた。











